様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３３９０２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２２０３

研究課題名（和文）法称著『知識論評釈』および注釈文献の総合的研究―未公刊写本の校訂と資料環境整備

研究課題名（英文）A comprehensive study on Dharmakirti's Pramanavarttika and its commentaries.

研究代表者
石田　尚敬（Ishida, Hisataka）

愛知学院大学・文学部・准教授

研究者番号：８０７１２５７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、インド仏教の伝統において認識論・論理学を大成した法称（ダルマキールティ、７世紀頃）の最初期の著作、『知識論評釈』（プラマーナ・ヴァールッティカ）第１章「推理論」について、インドのジャイナ教僧院において研究代表者が撮影した写本写真を用いて原典テキストの異読調査を行ったほか、法称の後期の著作『知識論決択』（プラマーナ・ヴィニシュチャヤ）に見られる並行文や他学派の文献における引用を調査し、解読のための資料環境の整備を行った。さらに、『知識論評釈』の注釈書について、カルヤーナチャンドラ（年代不詳）の現存しない注釈書のテキスト断片の収集を行い、他の注釈書との関係を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
法称（ダルマキールティ）は、インド仏教の伝統にあって認識論・論理学の議論に積極的に取り組み、その思索は、南アジアだけでなく、チベットなどの他地域にも大きな影響を残している。本研究は、法称の最初期の著作である『知識論評釈』（プラマーナ・ヴァールッティカ）の第１章「推理論」について資料環境を整備するものであり、今後の仏教思想研究だけでなく、比較思想研究などにも寄与するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to reinvestigate the text of Dharmakirti's Pramanavarttika (PV), the first chapter, and his own commentary thereon (PVSV), especially based on a Sanskrit manuscript photographed at a Jain temple in Patan, Gujarat. The text was simultaneously compared with Dharmakirti's Pramanaviniscaya—which has several parallel texts that stemmed from the PV and PVSV and was published from 2007 to 2011 in its original Sanskrit—as well as other philosophical texts such as Bhasarvajna's Nyayabhusana. Consequently, variant readings were comprehensively collected. Furthermore, fragments of the lost commentary by Kalyanacandra on the PV and PVSV were gathered from various sources, including the Jain philosophical treatises.

研究分野：インド哲学仏教学

キーワード：仏教論理学　ダルマキールティ　知識論評釈　プラマーナヴァールッティカ　サンスクリット語文献学　カルナカゴーミン　シャーキャブッディ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) インド仏教の伝統にあって、認識論・論理学を大成した法称（ダルマキールティ、７世紀頃）の最初期の著作、『知識論評釈』（プラマーナ・ヴァールッティカ）は、７世紀以降の南アジアにおいて、仏教徒の思想家だけでなく、ヒンドゥー教やジャイナ教を含めた他学派の思想家にも大きな影響を与えたほか、チベット仏教の伝統においても盛んに研究されたことが知られる。チベット仏教の伝統では、サキャ・パンディタ・クンガ・ギェンツェン（1182-1251）以降、同じ法称の手になる後期の著作『知識論決択』（プラマーナ・ヴィニシュチャヤ）から『知識論評釈』へと、その研究の重点が移されたことが知られる。『知識論評釈』第１章「推理論」と自注については、ジャイナ教僧院に附属する書庫に、紙写本１本（パタン写本）が残されている。さらに、イタリアの碩学トゥッチ博士（Guiseppe Tucci）によってネパールで貝葉写本１本が発見され、イタリアに持ち帰られた。その後、インドのマルヴァニア博士（G. Malvania）は、上記パタン写本を用いて（1959 年）、さらに、イタリアのニョーリ博士（Raniero Gnoli）は、上記２本の写本を用いてテキストを出版した。（1960 年）。これらのテキストは、批判校訂版として研究者の高い評価を得ているが、出版から半世紀以上経過し、現在の研究状況を鑑みると、再度検討の余地があった。

(2) インドにおいて、公立の図書館や古文書館（Archives）ではないジャイナ教僧院の書庫を調査することは困難を極めるが、研究代表者は、2009 年に世界的に著名な研究者であるジャイナ教の高僧、ジャンブヴィジャヤ師（Muni Jambuvijaya）のもと、グジャラート州パタン市のジャイナ教僧院において上記パタン写本を実際に手に取り、カラー撮影することができた。この写本は、これまでの校訂本でも用いられたものの、調査の結果、おそらくはモノクロームの複写が用いられたと見られ、再度検討の余地があることがわかった。また、本写本は紙写本であり、貝葉（Palm leaf）であるネパール写本より重視されなかった形跡があるが、紙写本であっても、それが基づいた写本の質によって、必ずしも軽視されるべきものではない。これまでに、ウィーン大学のシュタインケルナー教授（Ernst Steinkellner）に写本写真を寄贈し、同第１章中の論理学部分のドイツ語訳研究（2013 年出版）に使用されたが、本写本で訂正された箇所は数多く、不可欠の資料として評価されている。

(3) 法称の後期の著作である『知識論決択』は、上記『知識論評釈』のテキストを数多く再利用している。『知識論決択』は、長らくサンスクリット語原典写本が得られず、チベット語訳のみが参照されてきたものの、チベット自治区の仏教僧院で発見された写本の複写が中国蔵学研究中心（China Tibetology Research Center、北京）に保管されており、同研究中心とオーストリア科学アカデミーとの国際プロジェクトのもと、校訂が果たされ、出版されるに至った。2007 年には、ウィーン大学のシュタインケルナー教授によって第 1 章（知覚論）と第 2 章（推理論）が、2011 年にはローザンヌ大学のティレマンス教授と苫米地等流博士、パスカル・ユゴン博士によって最終第３章（弁証論）が公刊され、全体が参照可能となった。これにより、『知識論評釈』と『知識論決択』のテキストを改めて比較できることとなったが、この作業は、国際的にも重要性が認識されながら、未だ果たされていなかった。

(4) 『知識論評釈』の注釈書について、研究代表者は、国際学会「日墺共同国際シンポジウム：伝統知の継承と発展―インド哲学史における“テキスト断片”の意味をさぐる―」(2014 年８月）において、シャーンタラクシタ（寂護、725-788 頃）の『真理綱要』（タットヴァサングラハ）のジェイサルメール写本及びパタン写本の欄外に注記されたカルヤーナチャンドラ（年代不詳）の引用テキストと、同ジェイサルメール写本に含まれ、同写本との関連が推定される貝葉写本（１フォリオ）に記載された『知識論評釈』に対する注釈文（断片）を紹介した。カルヤーナチャンドラによる『知識論評釈』への注釈書については、フラウワルナー博士（Frauwallner 1937）や稲見正浩博士（稲見 2009）の研究があり、さらなる調査が期待されるものであった。

２．研究の目的

(1) 『知識論評釈』第１章「推理論」及びその自注について、カラーで撮影された写本写真を用い、トゥッチ博士及びマルヴァニア博士による校訂本を再検討することで、訂正や異読を整理し、資料環境の整備を図る。

(2) 2007 年から 2011 年にサンスクリット語原典テキストが公刊された法称の後期の著作『知識論決択』は、『知識論評釈』第１章及び自注のテキストの多くを再利用しており、パラレルテキスト（並行文）が多く存在する。これらを比較することで、『知識論評釈』第１章およぶ自注のテキストを再検討するとともに、『知識論評釈』から『知識論決択』へのテキストや思想の推移を考察する。

(3) 『知識論評釈』第１章及び自注については、サンスクリット語の原典テキストがほぼ全体に

亘って存在するカルナカゴーミン（８世紀頃）の注釈書の他、シャーキャブッディ（７世紀）やシャンカラナンダナ（10 世紀頃）の注釈書がチベット大蔵経に収められている。ただし、カルヤーナチャンドラの注釈書（ヴィヤーキヤーナ）は、ジャイナ教の諸論理学書に言及されることは知られるものの、その全容は明らかになっていない。そのため、カルヤーナチャンドラのテキスト断片をさらに調査し、シャーキャブッディやカルナカゴーミンの注釈書との関係を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 『知識論評釈』第１章（推理論）及び自注について、研究代表者が 2009 年に世界的に著名な研究者であるジャイナ教の高僧、ジャンブヴィジャヤ師のもと、グジャラート州パタン市のジャイナ教僧院において撮影したパタン写本のカラー写本を基に、文献学的調査を実施する。さらに、ニヤーヤ派のバーサルヴァジュニャの『ニヤーヤ・ブーシャナ』など、『知識論評釈』第１章「推理論」のテキストを大量に引用している他学派の著作を参照し、そこからもテキストの異読を収集する。

(2) さらに、『知識論評釈』第１章（推理論）及び自注のテキストを、法称の後期の著作『知識論決択』のテキストと比較する。『知識論決択』は、2007 年から 2011 年にサンスクリット語原典テキストが公刊されたが、『知識論評釈』のテキストを大量に採用していることが知られており、パラレルテキストも多く存在する。そのため、両テキストの比較を通して、『知識論評釈』第１章（推理論）及び自注のテキストを再検討することが可能であると見込まれる。さらには、『知識論評釈』から『知識論決択』へのテキストや思想の変化についても考察することが可能となる。

(3) 『知識論評釈』第１章（推理論）及び自注の注釈書のうち、現存しないカルヤーナチャンドラの注釈書については、フワウワルナー博士（Frauwallner1937）や稲見正浩博士（稲見 2009）の研究が存在する。本研究計画では、まず、フワウワルナー博士や稲見博士の報告するテキスト断片のうち、カルヤーナチャンドラの名称と共に引用されたテキストについて、カルナカゴーミンの注釈書との比較と行う。そこでは、カルヤーナチャンドラとカルナカゴーミンを別人物とし、カルナカゴーミンがカルヤーナチャンドラのテキストを利用しているという作業仮説のもと、カルヤーナチャンドラの思想の独自性を考察する。さらには、カルヤーナチャンドラの引用断片について、ジャイナ教の論理学書を中心に、さらに調査を進める。

４．研究成果

(1) 『知識論評釈』第１章（推理論）及び自注の原典テキストについて、ジャイナ僧院に由来するパタン写本のカラー写真を用いて考察し、さらに『知識論決択』のテキストと比較することで、パタン写本及びネパール由来の貝葉写本の２本を利用したニョーリ博士（Raniero Gnoli）の校訂本（1960 年）に採用されているテキストよりも、『知識論決択』のテキストに一致する異読情報を採集できた箇所が少なくなかった。さらに、バーサルヴァジュニャの『ニヤーヤ・ブーシャナ』が、『知識論評釈』第１章「推理論」のテキストを大量に引用していることも明らかとなり、そこでも『知識論評釈』のテキストの異読情報を多数収集できた。

(2) カルヤーナチャンドラの失われた注釈書については、これまでに研究代表者が学術大会などで発表してきたテキスト断片に加え、ジャイナ教の論理学書から新たなテキスト断片を収集することができた。これらは、今後の学術大会や学術論文で纏まった形で報告することとしたい。

(3) 『知識論評釈』の注釈者に関して、法称の孫弟子と伝えられるシャーキャブッディから、ナーランダー僧院で活躍したシャーンタラクシタ、カシミールで活躍したダルモーッタラ（740-800 年頃）を経て、カルナカゴーミンに至るまでの思想史を、主に「言語哲学」（アポーハ論）の議論の解明に基づき明らかにした。そこでは、シャーキャブッディによって体系化された法称の思想が、一定の基準となって受け継がれたことが明らかになった。このことは、最後期のモークシャーカラグプタ（11 世紀頃）にまで有効であることが明らかとなった。これらの研究結果は、本プロジェクトの研究成果として論文として公表した。

(4) 本研究計画の成果のうち、法称の『知識論評釈』及び『知識論決択』についての情報を、斎藤明他篇『仏典解題辞典〔第三版〕』（春秋社、2020 年）の「プラマーナ・ヴィニシュチャヤ」の項目（200-201 頁）の執筆に反映させた。

(5) オーストリア科学アカデミー、アジア文化・思想史研究所であったクラッサー（Helmut Krasser）博士及び当時研究員であった渡辺俊和博士（國學院大學准教授）より写本データを受け取った資料については、1984 年にビューネマン博士（G. Bühnemann）によりネパールのパトナ市の研究所で複写されたものであったが、これはプラジュニャーカラグプタによる『知識論評釈』第３章などの注釈書の写本の一部であることが判明した。これらの写本も重要ではあるが

『知識論評釈』第１章の研究としては対象外となるため、今回のプロジェクトの成果には含めていない。また、稲見正浩教授（稲見 2009）によりその重要性が指摘されている、ラーフラ・サーンクリッティヤーヤナ氏が 1930 年代にチベットで撮影した写本写真の調査については、その資料を所蔵するドイツのゲッティンゲン大学図書館を訪問することが新型コロナウィルスの感染拡大により困難となったことから、将来の課題とすることとした。

＜引用文献＞

① Erich Frauwallner, Zu den Fragmenten buddhistischer Autoren in Haribhadras Anekāntajayapatākā. Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes, 44, 65-74

② 稲見正浩、仏教論理学研究雑録 (1)、東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅱ、60、2009 年、119-135

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 石田尚敬	４．巻 51
２．論文標題 ディグナーガの刹那滅論	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 107-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石田尚敬	４．巻 50
２．論文標題 モークシャーカラグプタの思想史的位置付け―言語哲学を手掛かりとして―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 愛知学院大学禅研究所紀要	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石田尚敬	４．巻 67
２．論文標題 モークシャーカラグプタの言語哲学	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東海佛教	６．最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石田尚敬	４．巻 50
２．論文標題 ダルマキールティ以降の言語哲学の展開―〈他の排除〉の分類を手掛かりとして―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 愛知学院大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 49
2．論文標題 〈知の形象〉は語の意味か―ダルモーッタラの考察を手掛かりとして―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 愛知学院大学禅研究所紀要	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 69/2
2．論文標題 シャーキャブッディのアポーハ論の思想史的位置付け	5．発行年 2021年
3．雑誌名 印度學佛教學研究	6．最初と最後の頁 138-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.69.2_841	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 48
2．論文標題 アポーハ論におけるダルモーッタラの〈２種の否定〉解釈―〈他の排除〉（anyapoha）の分類に関連して―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 愛知学院大学禅研究所紀要	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 68/2
2．論文標題 アポーハ論の三段階発展説再考	5．発行年 2020年
3．雑誌名 印度學佛教學研究	6．最初と最後の頁 154-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.68.2_953	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 47
2．論文標題 シャーンタラクシタによる〈付託の排除〉の議論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 禅研究所紀要	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 45
2．論文標題 インド仏教の認識論とソシュールの恣意性の理論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 比較思想研究	6．最初と最後の頁 178-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石田尚敬	4．巻 83
2．論文標題 現代社会における人間の欲望―インド仏教思想を手掛かりとして―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本佛教學會年報	6．最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 石田尚敬
2．発表標題 モークシャーカラグプタ著『タルカバーシャー』の思想史的位置づけ― 第３章の個別論題を手掛かりとして―
3．学会等名 令和３年度第２回バウッダコーシャ ・プロジェクト全体研究会
4．発表年 2022年

１．発表者名 石田尚敬
２．発表標題 シャーキャブッディのアポーハ論の思想史的位置付け
３．学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 石田尚敬
２．発表標題 仏教学の最前線―日墺研究協力60周年シンポジウムの報告―
３．学会等名 愛知学院大学文学部宗教文化学科・大学院文学研究科共催第６回大学院研修会（オンライン）
４．発表年 2020年

１．発表者名 石田尚敬
２．発表標題 2019/09/07 アポーハ論の三段階発展説とは何だったのか
３．学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hisataka Ishida
２．発表標題 Recent research on Dharmottara's Pramanaviniscayatika, second chapter
３．学会等名 Philology, Philosophy and the History of Buddhism: 60 Years of Austrian-Japanese Cooperation（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石田尚敬
２．発表標題 インド仏教の認識論とソシュールの恣意性の理論
３．学会等名 平成30年度第1回（通算55回）比較思想学会東海地区研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石田尚敬
２．発表標題 シャーンタラクシタの言語哲学における思想的立場
３．学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 斎藤 明、丸井 浩、下田 正弘、蓑輪 顕量、梶原 三恵子、高橋 晃一、加藤 隆宏	４．発行年 2020年
２．出版社 春秋社	５．総ページ数 516
３．書名 仏典解題事典	

１．著者名 Akira Saito (in chief), Daigo Isshiki, Koichi Takahashi, Toshio Horiuchi, Hisataka Ishida, Kuninori Matsuda, Shiori Ijuin	４．発行年 2018年
２．出版社 The International Institute for Buddhist Studies of the ICPBS	５．総ページ数 165
３．書名 The seventy-five elements (dharma) of sarvastivada in the abhidharmakosabhasya and related works	

〔産業財産権〕

〔その他〕

愛知学院大学禅研究所 https://zenken.agu.ac.jp/research/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストリア	Austrian Academy of Sciences	Vienna University		